

大阪体育学会第53回大会 シンポジウム

アスリートの立場から

For Athlete

寺川 綾*

Aya Terakawa

齋藤 引き続きまして、「アスリートの立場から」ということで、ミズノスイムチームの寺川綾さんにご登壇いただきます。競技歴としては非常に長く、現役で長期間、日本の女子のトップ競泳選手としてチームジャパンを引っ張って、最後ロンドンオリンピックでメダルを獲得されました。素晴らしい最後だと思っておりますが、その選手の立場からオリンピック・パラリンピックで日本を元気に、大阪を元気にということのお話をしていただきたいと思っております。それでは、よろしく申し上げます。

寺川 皆さん、こんにちは。ミズノスイムチームの寺川綾です。先ほどから、2人の先生の大変貴重なお話を聞かせていただき、そして最後、上田先生の感動の映像を見せていただきました。もうこれで終わった方がいいのではないかと思うのですが、今日は、実はパワーポイント何も持たずに来ました。最後の最後まで、自分で何を話そうかと考えて、本当にこの場で限られた時間で話したいことを伝えたいと思ったので、あえて何も資料は持たずに来ました。

私からは「アスリートの立場から」というお話なのですが、簡単に私のたどってきた選手としての道をご説明させていただきます。私は3歳から水泳を始めて、某有名なスイミングスクールに入りました。そのきっかけは、

私は喘息を持っていて体が弱かったからです。特に、最初からオリンピックに出たいとか、水泳の選手として強くなりたいとか、そういうのではなく、ただ単純に体を強くするために、免疫力を高めるために始めたのが水泳でした。それもたまたまです。その後、水泳を続けていった中で、幼稚園に入って小学校に上がるまでに、選手育成のクラスに入れていただき、小学生に上がって選手クラスに入りました。きっかけは例えどんなことであっても楽しく、自分のやりがいを持って、長い間続けると、オリンピックに出てメダルが取れたということなのです。

私が一番初めにオリンピックに出ることができたのは、2004年のアテネオリンピックでした。当時私は大学2年生で、近畿大学に在学中のオリンピックでした。次のオリンピックは2008年の北京オリンピックだったのですが、そのときは代表選考会で3番だったので、オリンピックに出られずに終わってしまいました。そして、次、2回目に出られたのが2012年のロンドンオリンピックでした。ロンドンのときは、自分が一番何をしたいのかという目標を明確に持って挑みました。自分で持っていた最終的な目標はオリンピックで金メダルを取ることでした。結果、私が獲得したのは銅メダルだったのですが、それは後悔でも何でもなくて、長く競技を続けてオリンピックに出ることができ、さらに、そ

* ミズノスイムチーム

のオリンピックでメダルを獲得できたことに自分自身はすごく収穫のあるオリンピックになったと思いました。

私が最初にオリンピックに出たいと思ったのは小学校のときだったと思います。岩崎恭子さんをご存じの方いらっしゃいますか。やっぱり、皆さんご存じですね。どうしてご存じかという、やっぱりオリンピックで金メダル取ったからですよ。今お聞きして手を挙げてくださった方の中で、現地に行ってオリンピックを観戦されたという方いらっしゃいますか。いらっしゃいます。テレビで見たという方。ありがとうございます。やっぱりメディアの力で、テレビで見て感動し、影響を受ける方はすごく多いと思います。私も当時テレビで、その岩崎恭子さんのレースを家で見ていました。そして、レース直後にインタビューを受けられて、当時、岩崎選手は14歳だったと思うのですが、そのときに岩崎さんがおっしゃった言葉が「今まで生きてきた中で一番幸せです」というものでした。その言葉を私はテレビで見ていて、幼いながらに、「生きてきた中で一番幸せ」ってどういう感情なのだろうと思いました。ましてや、14歳でオリンピックに出て金メダルを取って。それは今思うと、ものすごくいろんな意味の詰まった14歳の言葉なのだろうと推測しています。私もテレビを見て、岩崎さんの言葉を聞いて、いつかオリンピックに出てみたい、やってみたい、メダル取りたいって思ったことをすごく覚えています。

それから、私も選手として、アスリートとして活動を続けて、最後に出たのがロンドンオリンピックでした。ロンドンのオリンピックでメダルを取って、いろんな方々に喜んでいただいて、すごくうれしかったのですが、オリンピックから帰ってきて、銀座でパレードをしていただきました。ものすごい数の方々が、銀座に駆けつけていただいて、本当にバスの上から道を見ている、どれだけの数の人がいるか分からないくらい、人が本当に点で見えるような数の皆さんが駆けつけてください

ました。私が現地でロンドンにいるときには、それだけたくさんの方々方がオリンピックを日本で見てくださって、応援してくださっているということを知らなかったのです。なぜなら、選手たちは現地に行って、ほとんど日本からの情報が入ってこなかったからです。そのため、そのパレードを見てびっくりしました。そんなにオリンピックって日本で盛り上がっていたのだと、自分でそのときに再確認しました。その後、会社へ行くため電車に乗っていました。そしたら、たまたま横に50代ぐらいの女性が座られていました。2駅ぐらい電車の隣の席に座っていて、彼女が先に駅で降りるときに、椅子から立って私の方へ振り向かれたのです。そしたら、彼女はものすごく涙を流して泣いていました。私が何かしたのかなと思って、そのときすごくびっくりしたのですが、その女性が降りる直前に、「ロンドンオリンピックをずっとテレビで観戦していました。こういうふうには、本当に実際その場で戦われていた選手が電車で自分の横に乗っていて、こんな偶然って本当にあるのです。私今までいろんなうれしいことがあったけれども、こんなにうれしいことはありません」と言って、女性が涙して喜んでくださいました。私はそのときに、自分が水泳を続けてきて、スポーツをやってきて、オリンピックに出られて、本当によかったと改めて思いました。それは結果だけではなく、自分ががんばってきたことだけではなく、スポーツを通して「生きてきた中で一番幸せです」と、岩崎恭子さんと同じ言葉だったのですが、人をこれだけ喜ばせることができよかったです。スポーツには人を感動させる力があるのだと、改めてそのときに、その方から教わりました。それだけスポーツ・オリンピックの影響力がすごいと実感しました。

今度2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されますが、ぜひとも、そのときに一人でも多くの小さい子どもたちにオリンピックを見てほしいと思います。それは、もちろん現地に行くのもそうですし、テレビ

で見るのもそうです。日本を背負って一生懸命精一杯戦う選手のがんばりというものを、子どもたちに見ていただきたい。いつか自分もそうになりたい、自分も日の丸付けたい。例えば、競泳だったら泳ぎたい、サッカーだったら走ってゴールしたい。そういう夢や希望を実際に見て、感じて、自分の子どもたちの夢につなげてもらえたらいいなと思っています。

私は自分が水泳をやってきて、当たり前のようにさっきからお話をいただいたJISSとかを使わせていただいていたたり、強化の施設を使わせていただいていたたり、海外に行って競技をしたりしていました。そのような今まで当たり前のように送ってきてことを、みんなが知っているものと勝手に思い込んでいました。プライベートな話で申し訳ないのですが、私は去年子どもを生みました。今はまだゼロ歳ですが、たまに時間があるときに、児童館に行かせてもらっています。そこで地域の方と情報交換をして、皆さんがどういう会話をしているのだろう。今まで水泳選手として人生を歩んできたので、全く水泳と関係ない方々がどういう生活を送って、どうやって情報交換されているのか、すごく興味があって、たまに時間を見つけて児童館に行きます。そのときに児童館にいらっしゃったお母さんに「子どもって何歳からプールに入れるのですか」と聞かれました。そのとき、私は「6カ月になる月からプールは始められるので、ベビースイミングをやっているスイミングスクールや地域のプールにぜひ足を運んでやってみてください」とお話しさせていただきました。私は今まで水泳をやってきたので、ベビースイミングがあることを知っているのは当たり前だと思っていました。でも、そういう全然水泳と関係ないお母さん方がベビースイミングというものがあることも知らず、どこに行けばプールに入れるのかもわからないというお話をされていて、改めて、自分が知っていることが当たり前ではないということに気がきました。先ほども映像が出ていたのですが、地域で活動すること。例えば、

サッカーだったら「なでしこ広場」であったりとか、水泳だったら例えば小学校、中学校のプールはもちろん、保育園のプールに現役を引退した選手が、アスリートが実際に足を運んで一緒にプールに入る。強くなる、速くなるための水泳だけではなくて、水に入ると楽しいよ、プールに入るとこんなに気持ちいいよと、まずは子どもたちに泳ぐことの楽しさを知ってもらおう。そして選手を目指してオリンピックに出てもらうということが、一番の基礎だと思います。そういうところを、これから大事にしていければいいなと思います。また、そういうことがないと、子どもたちがみんな女子サッカーに行ってしまうのではないかな。みんな、そんないろんな活動をされているので、競泳もスイミングスクールだけが全てではなくて、学校水泳だけが全てではなくて、そういう基礎となる幼稚園や小学生のときに、プールに選手が実際に行き、楽しさを教えて、幅を広げて今後の水泳界に生かしていければいいなと思っています。

そして、また、ちょっとお話しがずれてしまうのですが、私が実際にロンドンオリンピックに行ったときに、まず「ロンドンのイメージとして何が残っていますか」、「印象はどうでしたか」と聞かれましたが、その国のことを何も分からない。何も知らない。私は選手として結果を出すために、その国に行き、そのプールで用意されたバスに乗って、選手村に入って、送迎バスに乗って、またプールに行く。競技が終わったら、また選手村に戻ってきて、競技が終わったら、すぐに空港に行き、飛行機に乗って日本に帰るというのが、私たち選手のスケジュールだったからです。だから、実際に「ロンドンに何がありましたか」と言われても何も分からないし、「どんな食べ物がおいしかったですか」と言われても何も知らないのです。だから、ぜひとも2020年のオリンピック・パラリンピックが開催されたときは、日本の良さをよりアスリートの方へ伝えることが、今後の日本につながるのではないかなと思いました。オリンピックが決

まったから、そこがゴールではなくて、そこから新たにスタートして始めることが大事だと思います。何がいいですかね。より大阪を元気にというところから、私が勝手に一個人の意見として思ったことは、何かしおりみたいなものを作って、例えば大阪のお勧めの食べ物とか、お勧めの場所とか、ローカルなものを詰め込んだものを駅で配るとか。そうすると、選手は時間があるときに見て、「日本ってこういうところもあるんだ」、「京都だけではなくて、大阪にはこんなおいしそうな食べ物があるんだ」、「素晴らしい場所があるんだ」というのは知っていただけるきっかけになると思います。そういうものが、あとあと東京オリンピックでこういうことがあったなと選手が思い返して、記憶に残るオリンピックにするための一つ大切なことではないかなと思っています。私が実際にロンドンへ行って印象に残ったことというと、試合の結果、そして、もう一つは、マルチサポートハウスに東日本大震災の被災地の子どもたちが、これくらいの紙に一言ずつ選手にメッセージを書いてくれたことです。マルチサポートハウスの玄関に入ってすぐのところに、たくさんのメモが張り付けられていて、被災地の子ども

たちが「応援しています」、「日本でエールを送っています」、「テレビで見えています」、「皆さんがんばってください」と書いていたのが、私のロンドンオリンピックの思い出です。だから選手としては、実際にそうやって自分の目で見て、自分たちで確認しないと記憶に残るオリンピックにはならないのです。そういうものがなければ、どこでやったではなくて、結果だけ。選手の立場からすると、どこどこのオリンピックは何番だった。どこどこのオリンピックは駄目だったとか、そういう結果しか、その国の印象が残らないのです。だから、ぜひとも選手の立場から、そういう記憶に残る、思い出の残る、それこそ、おもてなしの心が残るオリンピックになってほしいという期待を込めています。自分自身も東京のオリンピックに向けて、これから先の子どもたちの育成にも、スポーツ界が盛り上がっていくように、がんばりたいと思っております。本当に中身の無い話で申し訳ありませんが、今現在、私が最も伝えたいことを言わせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

齋藤 どうもありがとうございました。